
ぼくののび太くん

神田春希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ぼくののび太くん

【Zマーク】

Z03001

【作者名】

神田春希

【あらすじ】

ぼくは久しぶりに未来にやってきた。妹のドラミに呼び出されたからだ。　　ドラミの用事つて、なんだろう?のび太くんは「ゆつくりしてきていいよ」って言つてたけど、やっぱり心配だから用事が終わつたらすぐ帰ろうか?

二〇・一（前書き）

ドラえもんが今年で30周年だそうで、おめでたい限りです。
私自身物心付く前からドラえもんを見ていたこともあり、大好きな
作品のひとつです。

書いているうちにちょっと寂しい話になってしましました。
つたない文章で恐縮ですが、もし宜しかつたら読んで見てください。

「お兄ちゃん。

急に呼び出して『じめんなさいね』

妹の『ドリ』がぼくの田の前に紅茶を出しながら言つた。

今日は『ドリ』に呼び出されて、久しぶりに未来の世界にやつてきた。

未来の世界出身のぼくが「未来」というのは、ちょっと違和感があるような気もするけれど、ぼくが未来で過ごした期間よりも、のび太くんのいる世界のほうが長くいるから、ぼくとしてはそのほうがしつくつとくる。

「別に平気だよ。

未来新聞であらかじめ、のび太くんに危険がないか調べてきたし。それに、のび太くんが『大丈夫だから』って言つてたし……』
ぼくはのび太くんを思い出し、ちょっと鼻がつんとなつたので、『ドリ』に気が付かれないよう、紅茶をすすつた。

紅茶は現代にはない品種のものだったので、ぼくは未来の紅茶に少しどきりとする。

もし、急に現代に戻れなくなつたら、ぼくはのび太くんのいるこの時代です』をなければならないのだろうか?

ぼくは何気なく窓の外を見る。

そこに見慣れた景色は無く、無機物の集合体のよつたな建物が静かに佇んでいた。

「現代になじんでしまつて、いじはまるでドリの世界だよね」

ぼくは向の氣なしにぽつりと呟いてしまった。
ドリミはぼくの眺めている方をちらりと見ると「やうね」とだけ
言った。

「ねえ、お兄ちゃん。

そんなにのび太さんの事が好きなの？」

「え？」

ぼくは急な質問に驚いてドリミを見た。

兄であるぼくの目から見ても、かわいらしさドリミ。
そんなドリミが、先ほどの柔らかな笑顔ではなく、真剣な顔
でぼくを見ている。

「うん。大好き」

ぼくも真剣に答えた。

ぼくは、のび太くんが好きだ。
もし、叶うなら、ぼくはのび太くんの傍にずっと、ずっとといたい。
のび太くんの願いを叶えてあげたい。
喜ぶ顔を見てみたい。

「お兄ちゃん。よく聞いて。

私たちは口ボット。のび太さんは人間よ。

お兄ちゃんがどんなにのび太さんのことを思つていても、彼はすぐ
大人になるわ。

そうしたら　わたしたち子守口ボットは、役目を終えるしかない
のよ」

ドリミの声がとても冷たく、冷酷なもに感じられた。

「それは　ドリミだつてそうじやないか！
ドリミはセツシくんの子守口ボットだろ？」

ぼくは少し声を荒げて反論した。

子守口ボットの役目は、対象者が子供であればこそ、だ。

そんなのは重々承知している……。

いや、田をそむけていたのかもしれない。

だから、今『リニア』に言われたことで、ムキになつて反論してしまつていいのだから

「『リニア』めさ。

ちよつと言ひ過ぎた

「つりん。

わたしも、配慮がたりなかつたわ」

ぼくたち口ボットは何かしらの役田を背負つて、この世に誕生していく。

世界に必要な歯車の一部として。

ぼくたちを作つた研究者は、ぼくたちに『心』まで付けてくれた。心は研究段階だつたらしげけど、そのお陰でぼくや『リニア』のよつな子守口ボットという口ボットも世の中に出ていくよつになつた。

心があると、子供の子守をするのに最適なんだそうだ。

こうなれば母性とか父性とか。そう言つた『家族的な愛情』をインプットするときこそ、心はかなり重要な役割を果たすらしく。らしいと言つるのは、僕自身よく分かつてないから。

ぼくは他人によつてインプットされたからのがい太くんと一緒にいるわけじゃない。

ぼくはのがい太くんが好きだから居るんだ。

決してぼくは操られてなんて、いない。

実際、ぼくはインプットされていないはず、だ。

「お兄ちゃん。

わたし、気になっていたことがあって。

それで、今回お兄ちゃんに来てもらつたの。

ちょっと前にお兄ちゃんが未来に帰つてくるつて話あつたわよね。もう、のび太さんのところには戻れなくなるつて……。

実際あの時、帰つてきたけど、急に『のび太さんの子守ロボットなんだからちゃんと子守をして来なさい』って言われて返されたですよ？

未だにあれが分からなくて……。

だつて、タイムパトロールに過去に行つてはいけないつて言われてたのに、急に行つてこいなんておかしいじゃない

確かに、普通なら考えられないことだ。

ぼくはあの時、一度とのび太くんのいる現代に戻つてはいけないときつて言われた。

そして、もう一度禁を犯せば、大罪になるとまで言われたのだ。もし過去に行けばのび太くんにまで、罪は及ぶつて言われて、ぼくは毎日毎日悲しくて抜け殻のようになつてた。

実際何もする気が起きなくて、ドラミには迷惑をかけた。

尻尾のスイッチを切ることもしばしばあって、ドラミはいつも悲しそうにぼくの尻尾を引っ張つて起動する。

もうぼくは起動しなくてもいいのに。

のび太くんのいない世界にぼくが居ても、なんの意味もないのだから。

そんなある日。

ドラミはぼくの顔を見て泣きながら言つた。

「お兄ちゃん！ のび太さんのところに、行つてもいいつて！

戻れるんだよ！？ お兄ちゃん！――」

ぼくは狐につままれたような気持ちで、とりあえず風呂敷を担いでタイムマシンに乗った。

今考えると、荷物は四次元ポケットに入れればよかつたんだけど、あまりの事に気が動転してたんだ。

ぼくがタイムマシンから降りると、のび太くんが鼻水と涙を流しながら

「ドラえもんはもう絶対こっちにこないんだ！」って叫んでたつ

け。
ぼくは嬉しくて、この『嘘』を本当にしたくて、そつとのび太くんに説明したんだつけ。

「ドラえもんはね、本当に偶然だつたんだ。
のび太くんに『どうしても困つたことがあつたら使つて』と言つて置いていつた箱があつてね。

状況によつて出てくる道具は変わるから、実際何が出るかはぼくも知らなかつたんだよ。

それをのび太くんが使つたとき、偶然言つたんだ。
ドラえもんはもう絶対こっちに来ない。会えるわけないじゃないか！ つて

ぼくは少し冷めた紅茶を一口飲む。

「お兄ちゃん、その道具つて……」

「ウソ800（ヒイトオーボー）だよ。

あの道具は強く思えれば思つほど本當になるから、だから帰つてこれたんだ。

ぼくは本当に嬉しかつたんだよ。

のび太くんがぼくのことを本当に大事に思つていたつて分かつたから

「そう。

なら安心したわ！」

「ドリミの顔が急にぱみっと明るくなつた。

「わたし、本当に心配したのよ。

「また未来に帰つてこいつと言われるんじゃないとか、やつぱり罪は償わなければならないつていわれるんじゃないのかつて冷や冷やしてたんだもん。

「そういうことは、ちやんと書つてくれなくちやー！」

「ちやんと書えばよかつた。」
「あ、お茶菓子忘れてたわ」とこいつ、からやかに和室に向かつた。

「そうだね。

「ぼく、ドリミに心配かけてばかりだからね。ちやんと書えばよかつた。

「でも、なんとなくぼくの心こ、ちつとしまつておきたかつたのも事実で。

「言つてしまつたら、消えてしまふこやつな気がして書えなかつたんだ。

「ぬんねドリミ。心配かけて。

「お兄ちやんー！

「見てみて！ だら焼も買つてきてるんだからー！ 大好物なんだしょ？

「それと、しぶーい日本茶も用意してるのよ！」

「ドリミはワインクシード、ぼくにお皿こつぱーのだら焼を持つてきてくれた。

「お、おいしそうー！」

「絶妙な焼き加減。あんこの上品な匂い。

「おー、もち入りのまであるじやないか！」

「ぼくは思わずよだれをたらしちまつ、慌てて手で拭いた。

「いかんいかん。」これ以上兄としての威厳を崩さないよつこしなくては。

そう思つてみると、ドリルは、これまでお皿にこつぱいのメロン

パンを持ってきた。

「こっちはわたしのね」

そう言つてぼくの皿の前に座る。

「今日はもう暗い話はナシ、ナシ！
あつちの時代のお話聞かせてね！
ね、お兄ちゃん」

「こと笑うドリルせ、ぱくつとメロンパンをかじる。
ぼくもどら焼きをぱくりと食べて、いろんな話をした。
のび太くんの話が中心だけど。

ねえ、のび太くん？

ぼくは君に会えて幸せだよ？

もし、のび太くんが大人になつて、ぼくのことを必要としなくな
つたら。

そうしたら、ぼくの寝てこむつむ、そつとぼくの尻尾を引っ張
つてね。

ぼく、もう辛くて寂しい思いをするのは、嫌だから

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0300i/>

ぼくののび太くん

2010年10月10日14時23分発行